



Winter Technique Special

DRIVE & STYLE BOTTOM TURN

基本なだけに、
こだわりたい!

徹底解剖「ボトムターン」

サーフマニユアーの華といえばエアやリエントリーなどのド派手なアクション。だけど、そんなハイエンドなテクはエキスパートオンリーで高嶺の花。中級者レベルの僕らが極めるには正直無理なテクニク...でも、ボトムターンなら、頑張りや上級者みたいのできそうな気がしない？基本といわれるボトムターンだけど、ご存じの通りその奥はかなりディープ。しかもラインの取り方やスタンス、手の位置などで、不細工にもお洒落にも様変わり。ならば、この冬はボトムターンに磨きをかけちゃいましょう！スタイルにこだわるサーファーに捧げます、ボトムターン徹底解剖。



KELLY SLATER

ケリーのメンタワイでのボトムターン。この波の高さに対して、これだけフェイスを広く使えるのは超人的なスピードとバネがあるから。胸は出っ尻の尻より下にあるのに、顔は90°近くまで反り返っている。カリスマならではの究極のパワードライブ
PHOTO: SCOTT NEEDHAM/SNP5000.COM



MICK FANNING

ホワイト・ライトニング(白い閃光)の異名をとるミックのバックサイド・アプローチ。世界最高のサーファーのボトムターンはことごとくカリックスしている。左手で水面をなでる様子、右手の力の抜け具合がとてもスタイリッシュ
PHOTO: SIMON WILLIAMS



PANCHO SULLIVAN

ベテランのハワイアン、パンチョが描くバックサイド・クラブレール。水面に尻が付きそうなほど腰を落とし、猫んだレールでバランス調整。みなぎるパワーを余裕でスイートスポットに向かわせるアプローチはまさに芸術の世界
PHOTO: SHORTY



ANDY HONG

アンディがインドネシアで見せたパワードライブ。しなやかな身体を駆使してフル加速しているものの、上半身はリラックス。スプレーを飛ばしながら水面をなでる余裕振り。難しいことをそう見せないところがアンディの真骨頂
PHOTO: JASON CHILDS

FACE TO FACE WITH THE KING KELLY SL8R

8度目のワールドタイトルを獲得したカリスマの肉声 ケリー・スレーター、今季を語る。

セミリタイア以降、精力的にツアーを転戦してきたケリー・スレーター。昨年、念願の王座に復帰したことは記憶に新しい。7度目のチャンピオンインタビューでマイクを向けた際、今季の参戦については明言しなかった。だが、誰もが参戦を望むことを知るケリーは初戦に登場、優勝という格好でファンに応えた。続く第2戦にも姿を表し二連覇を達成。その勢いでツアーをフォローした結果、自身が持つ最多記録を8に伸ばした。そんなカリスマが、今季のバックステージを語ってくれた。

Interview by Col Bernasconi

「純粹にヒートを楽しみたいというスタンスでの参戦が、結果、対戦相手たちに一層プレッシャーになったと思う」

サーフィンライフ (以下SL): 8度目のワールドタイトル獲得、おめでとう。誰もが納得の行く格好での勝利になったわけだけど、ケリー自身、相当ストークしてるんじゃないかな?

ケリー・スレーター (以下KS): 何? 今、ストークしてるんじゃないかって訊いた?

SL: ああ、よもや落ち込んでないよね?

KS: ジョークだよ (笑)。ストークしていることに間違いない。でも、今シーズンを振り返ってみると妙な気分なんだ。今まで以上にツアーに対して集中した年となり、来る日も来る日もフォーカスしていたんだ。恐らくインスピレーションを求めていたんだと思う。

SL: 家族も大喜びしてくれたんじゃない?

KS: そうだね。兄弟のショーンやステファンもストークしてくれていたよ。ただ、ステファンは個人的に辛いことがあったようで、僕に相談したいと思っていたらしい。でも、僕の気を紛らわしてはいけないと気遣い黙っていてくれたんだ。ツアーを転戦してしていると、こういうことが辛い。

SL: とところで、ケリーがタイトルレースに王手をかけたとき、ボッツ (マーティン・ボッター) が、タジ (バロウ) は才能溢れるサーファーだけど、コンペティターには向いていないと口にしてたという話がある。ケリーはタジと仲が良いから訊くんだけれど、タジの立ち回りはうまくいってないと思う?

KS: うーん、タジはプレッシャーを受けやすいように思える。いったんプレッシャーを覚えてしまうとつものタジらしいサーフィンができなくなってしまうんだ。でも、これは言わば、みんなに該当すること。今年のタジのパフォーマンスをじっくり見直せば、ボッツも勘違いしていたと思えばいい。そうした側面を言うのであれば、僕はトム・キャロルが一番プレッシャーに弱いと思うけどね。

SL: タジがフランスで早々に敗退したわけだけど、正直安心した?

KS: もちろんホッとほしたよ。タジには17位が2試合あって、僕には3位と5位という結果があった。雑誌では僕のレイティングがクローズアップされていたけれど、ポイントでタジが近づいて来ていたし、アンディ (アイアンズ) もフランスで優勝して迫ってきていた。だから、とにかく良い成績を残すしかなかった。タイトルレースは順位にのみ焦点があたり、細かなポイント争いにまで話が及ぶことは少ない。実際には数字の上で5人が優勝圏内にいたんだ。スペインで僕がクォーターファイナルに勝ち上がったとき、ミック



ムンダック競演例、ローカルによる勝利者突き落としの儀式で投げられるケリー。1人がなかなか手を離さず、手前の水深が60cm程度しかなかったため、内心かなりヒヤヒヤだったとか

(ファニング) とパーコ (ジョエル・パーキンソン) が対戦することになってたし、セミファイナルに上がったときには、タジとアンディがクォーターに勝ち上がった後ら対戦が待っていた。だから僕は、クォーターからかなりヒートアップしていたんだ。

SL: スペインでのアワードの前に、ローカルに港から投げ落とされる怪行があったよね。そのときの話を訊かせて欲しいんだけど。

KS: まるで、僕に怪我させたいというほどの勢だった。僕の足を掴んだやつが手を離さなくて、身体が捻れてしまったんだ。あれは恐かったよ。もし遠くに投げることができなくて手前に落ちてしまったらとても危険。水深がわずか60cmほどしかないんだから。飛ばされるときはそんなことを考えていたから、混乱状態だった。なんとかうまくいって良かったんだけど。

SL: ケリーを投げたのはスペイン人と、バスク地方から来たやつだったんだよね?

KS: そう。スペイン人3人とバスクのやつが6人。

SL: とところで、タイトルを決めたのは、パーコとのヒートだったよね。セミファイナルの最後の1本で優勝をもぎ取ったヒート。ああいう勝ち方は気分的には最高の気分なのかな? 心臓に悪い気もするけど。

KS: 去年までパーコには負け放しだったんだ。2、3年前のトレッソルズのイベントでは勝てるゲームを落としたり。とにかく勝てなかった。そして、ようやく今年のベルズ戦で勝つことができたんだ。トレッソルズではパーコがひたすらハイレーススコアをたたき出していたから、ヒート中はとにかく自分のなかで最高のサーフィンをするよう心がけた。もしそこでパーコが僕を破ってファイナルに進出したり、さらには優勝でもしてしまったら、そのままの勢いでタイトルレースを制覇していくことがわかっていたから。あのヒートは今年の行方を左右する、今シーズンで最も重要な対戦であると感じていた。どんなコンテストにもそういうキーポイントとなるヒートはあるものなんだ。スペイン戦では、すべてのカギを握っていたのはセミファイナルだった。クォーターでポビー (マルチネス) がアンディを破り、ディンゴ (ディーン・モリソン) がタジを負かした段階で、タジはタイトルレースから脱落。クォーターで負けなければまだチャンスは残っていたんだけど。そして、セミファイナルでパーコとの対戦が決まったときは因縁を感じたよ。ワールドタイトルのかかったヒートの相手の手が、去年までまったく勝てなかった人物なのだから。

QUICKSILVER PRO GOLD COAST 1ST

PHOTOS: ASPWORLDTOUR.COM

例年開催されるスナッパーロックではなく、デュランバー会場で行われた第1戦。タジと交えたファイナルの最終で9.0をマーク、優勝を手に。ツアー初戦での優勝はケリーにとって実に3年振りのこと。

AVIADOFF THE BEACH

THE WORLD TOUR

Victoria The Place to Be

RIP CURL

RIP CURL

RIP CURL

RIP CURL

RIP CURL

RIP CURL

RIP CURL

RIP CURL

RIP CURL

RIP CURL

RIP CURL

RIP CURL PRO BELLS BEACH 1ST

ベルズビーチに約10年のクラウンズフェルが続き、過去最高のファイナルと称された第2戦。ハードリップで助舟の助舟を負傷するも、それまでマン・マンで勝ったことがなかった優勝パーコを破り歴々の2連覇を達成。

